



活動報告書

「オジロワシ野生復帰事業」

オジロワシ野生復帰研究会

本研究会は、オジロワシ・オオワシなど絶滅のおそれのある猛禽類の飼育下繁殖個体を野生復帰させる場合の技術の確立と極東地区個体群への補充を目的に1997年(平成9年)より継続して事業を実施している。

以下に、助成事業期間(平成13年9月1日～平成14年8月31日)の活動内容について、活動報告書から抜粋して、その概要を報告する。

【事業内容】

助成事業期間中に、飼育下繁殖個体が得られなかったことから、リリース等野生復帰技術および追跡調査の技術の確立を目的に保護収容された野生のオジロワシ幼鳥を2羽、オオワシ幼鳥1羽について血液検査を実施後、発信機装着、リリースケージ内での飼育、リリース、受信追跡調査等を行なった。

海外の研究者との協力事業として、2000年夏からロシアで発信機を装着後リリースした

オジロワシ・オオワシの巣内ヒナ50羽について、北海道内での受信追跡を実施し、14羽の受信を確認した。

これらの受信追跡に当たっては、現在は釧路市動物園にしか受信施設がなかったため、受信範囲を拡張するため、平成13年9月に受信機4セットを助成金で購入し、必要に応じて会員が携帯して追跡調査を行なった。

将来のオジロワシ繁殖個体の確立を目指し、円山動物園と釧路市動物園のペアの組換えを行なうと共に、オオワシで実績のある釧路市動物園のハクトウワシを仮母として使用し、昨年孵化実績のある斜里町知床博物館の有精卵を抱卵させる孵化実験を実施したが残念ながら孵化にはいたらなかった。

【活動の成果等】

1. 活動に取り組んだ団体は、黒田区の子供会、婦人会、土地改良区、消防団など活動に従事した人員数は、約60名

1. 今回の活動を通じて、区内住民の生態系保護、水環境保全等に対する関心が高まり、貴重種の保護協力体制が実りつつある。

これらの活動が成果あるものとなった要因は、琵琶湖博物館の専門家の指導・情報提供、県・町の行政の援助、地元民の理解と協力、これら三者が一体となって取り組んだことが功を奏したと思われる。

しかし、生態系保護や環境保全の活動は、対象範囲も広く、財政的な問題と長期にわたる継続的な努力が必要であり、各種の支援制度の充実が望まれる。

平成14年2月10日に「オジロワシ・オオワシの現状と将来」と題したシンポジウムを開催し、約80名の参加者があった。

- ・開催場所 とかちプラザ（帯広市西4条南13丁目）
- ・講演者および講演内容

米国人猛禽類研究者Michael James McGrady 氏

「人工衛星追跡により解明されたオオワシの幼鳥と亜成鳥の移動」

ロシア極東の繁殖地であるマガダン、カボロフスク、アムール、サハリン、カムチャッカから幼鳥に発信機を取り付けて放鳥し、人工衛星での追跡。この調査による繁殖地と越冬地の移動行動など。

(社)北海道野生生物保護公社 齊藤 慶輔 氏

「オオワシ、オジロワシに迫る危機－繁殖地サハリンと越冬地北海道の現状－」

繁殖地であるサハリンの現状と越冬地である北海道の鉛中毒の現状など。

釧路市動物園 志村 良治 氏

「オジロワシ野生復帰研究会の活動」本研究会の活動状況など。

また、助成事業期間中、本研究会会員およびオジロワシ・オオワシの受信追跡調査協力者(無線愛好者など)を対象に機関誌「オジロワシニュース」を合計13回発行した。

【今後の課題】

本研究会が目指すオジロワシの飼育下繁殖個体を野生復帰するために、できるだけ早期に繁殖個体を得る必要がある。このためペアの組換え、受精卵の移動・仮母の利用を試みたが、今回は残念ながら成功しなかった。

今後も可能な限り様々な手法により繁殖に努める。

現在、受信基地は1ヶ所で、その他無線愛好者の協力により追跡調査を行っているが、これにも限界がある。今後は受信基地の整備を行い、さらに広範囲の追跡調査を行う必要がある。

【閉じる】